

# 研究通信

村農社会研究会機関紙

No. 3

本部

東京都文京区大塚三丁目二四

東京教育大学社会学研究室

通信編輯部

東京大学文学部社会学研究室  
東京大学文部省本富士一

## 走り百姓

武田良三

お尋ねつて最近朝鮮の革命史料を調べてみたが、そこに「走り百姓」という文字が実際に多く出てくるのに気がついた。これは過村を逃走して、他国に逃亡してしまった農民のことだ。加賀藩あたりには手を焼いて、いろいろの法令をつくって禁止しようとしても、仲々にこの取締は困難であったようである。とくにこの頃向は、あの有名な三代の前田利常の改作法実施以前のいわゆる給人知行の時代に多く見られた現象で、加賀藩が改修作戻ししなければならなかつた理由の一つは、この走り百姓の問題の解決であり、この走り百姓をなんと小母村に足止めして、農耕に精励させるために、封建合理化の御制農業を敷いたのがその改作法であつた。それが分権的な封建制度から集約的な封連制への移行を示すといつに

ような論議は中世史家の研究にまかせるにしよう。

いまここで脚題としようとしているのは、もういう歴史的解釈ではなく。現在の日本の農村にも、こういう「走り百姓」的な現象が現在的にも潜在的にも実に多く見られることで、それは單に封建治下の如前藩に起つた現象だけではない我々の周囲にレゾロソとしている日本の現実である。しかもそれが悪化していく、いわゆる給人知行下に苦惱していた「走り百姓」をしてそのまま近代日本の社会体制の推進の結果となってきた現象だけに限らず、相賃農といつた狭い地域のことではなく、むろ日本の全国的な問題として考へなければならぬ深刻な現実である。

最近農村に居を構えている灰人と久瀬義正は、農村に住む者たちが、郷里の田舎町の農立高等学校に志願者が殺到したり、その高等学校の卒業生が多數上級の新制大学に受験したりする傾向を、地方の人々

の好学心の向上と觀察するには甘い考えあると指摘された。これは結論的にいえば農村の次男男財策の無意識な一つの解説方法である。分割してやる土地のない農民は自分の子供の将来と思うと、どんな無理をしてでも私立高等学校にまで子弟を送ることで、さる農家はまだ農村でも上流に属する幸せな階層で、それすらできない農家は、潜在的失業人口を抱えて苦悩するか、また「走り百姓」として都市への潜入を考えるほかに方法はないなくなってくる。しかもその都市では徒らに人口の膨脹するのを嘗めてその対策を考えている仕事なのだから、問題は悪化するばかりである。村落社会学はこうした日本の現実からもちろん目を反らしてはいないし、反らしてよいものではないが、それを村落の範囲で解決しようとしても、出来ない相談である。農山漁村の問題は同時に都市の問題であり、都市の問題は同時に農山漁村の問題である。我々は村落社会研究会を、こうした日本の居場所的状況下に、村落社会研究会だけの集まりとしてではなく、都市研究者、人口問題研究家、農業経済学者、その他、その他、官僚に新聞記者にも参加科学

者にも誰にでも開放して、真剣に日本の  
将来を考える人々の開かれた集団として  
育ててゆきたいものである。(早稲田大学)